JMSCA 登山月報 第595号 平成30年10月15日発行
昭和45年12月12日第三種郵便物認可（毎月一回15日発行）

登山月報

トゥインズ（7,350ｍ）

ＩＦＳＣ世界選手権2018報告 …… 2
パラクライミング世界選手権2018 …… 4
JMSCA公認「岸和田CANCANカップ2018」第１回小学生リードクライミング競技会 … 4
第119回 Mountain World …… 5
新連載『日山協と私』 …… 6
平成30年度安全登山指導者研修会（東部地区）報告 …… 7
みんな集まれ！ ジュニア登山教室 in 立山2018 …… 8
第７回関東地区自然保護交流会報告 …… 10
シスパーレ登山隊2017がピオレドール受賞 …… 11
2018年度「上月スポーツ選手支援事業」認定式 …… 11
平成30年度 臨時理事会報告 …… 12
JMSCA、寄贈図書、表紙のことば、編集後記 …… 12

No.595

IFSC世界選手権2018報告

会場：オーストリア・インスブルック
予選：クライミングセンター
準決勝、決勝：オリンピックワールドインスブルック
（1946、1976年冬季オリンピック施設）
期間：2018年９月６日～16日

■女子

順位	コンバインド	国	リザルト
1	GARNBRET Janja	SLO	5, 1, 1
2	SA Sol	KOR	1, 2, 6
3	PILZ Jessica	AUT	2, 6, 2
日本人最高位：4位 野口			6, 3, 3

順位	コンバインド	国	リザルト
1	GARNBRET Janja	SLO	2t3z
2	野口　啓代	JPN	2t2z
3	GEJO Stasa	SRB	1t2z

順位	コンバインド	国	リザルト
1	PILZ Jessica	AUT	TOP
2	GARNBRET Janja	SLO	TOP
3	KIM Ja In	KOR	34+
日本人最高位：4位 小武			33+

順位	コンバインド	国	リザルト
1	RUDZINSKA Aleksandra	POL	7, 56
2	BROZEK Anna	POL	7, 91
3	KRASAVINA Mariia	RUS	–
日本人最高位：25位 野中			9, 061

■男子

順位	コンバインド	国	リザルト
1	SCHUBERT Jakob	AUT	2, 1, 2
2	ONDRA Adam	CZE	5, 2, 1
3	HOJER Jan	GER	1, 4, 6
日本人最高位：4位 原田			4, 5, 3

順位	コンバインド	国	リザルト
1	原田　　海	JPN	4t4z
2	CHON Jongwon	KOR	3t4z
3	VEZONIK Gregor	SLO	3t4z

順位	コンバインド	国	リザルト
1	SCHUBERT Jakob	AUT	36+
2	ONDRA Adam	CZE	36+
3	MEGOS Alexander	GER	3
日本人最高位：4位 楢崎			31+

順位	コンバインド	国	リザルト
1	ALIPOURSHENA Reza	IRI	5, 63
2	MAWEM Bassa	FRA	–
3	KOKORINS tanislav	RUS	6, 028
日本人最高位：21位 楢崎			6, 697

© Sytse van Slooten - IFSC

© Eddie Fowke - IFSC

今大会は、クライミング王国オーストリアの復活とオリンピックに向けた各国の意識を感じた。

ボルダリングは野口（女子）が２位、原田（男子）が優勝と牙城を守ったが、リード、スピード、コンバインドでは海外の選手の活躍が目立った。女子では、Janja GARNBRET（ＳＬＯ）、男子ではJakob SCHUBERT（ＡＵＴ）が常に１位、２位につけるパフォーマンスは圧巻だった。特にJanjaは、ワールドカップ第３戦以降は出場せず、この大会にかけていた。そして、日本のオリンピックに向けた課題が多く見えた大会でもあった。

【強化委員長報告】

今大会の日本チームのハイライトはボルダリング種目であった。男子ボルダリングで原田が決勝ランドで唯一の４課題を全完登し、見事優勝。2016年パリ大会の楢崎智亜に続き、日本は２冠を達成した。また、女子ボルダリングでも野口が力強いクライミングで２位となり、前回大会の３位から１つ順位を上げた。リード種目でも男子・楢崎明智、女子・小武芽生が４位と健闘した。

日本からは男子９名、女子３名の計12名が参加したが、そのうち９名がいずれかの種目で決勝へ進出し日本チームの全体的な強さを印象づけることができた。しかし、最大の目標であったコンバインド種目では男子３名、女子２名と順調に決勝へ駒を進められたが、メダル獲得には至らず非常に悔しい結果となった。最大の敗因は最初のスピード種目でのフォールススタート（フライング）であった。今大会から使用が開始されたレーザー方式のタイミングシステムの影響も少なからずあったとは思うが、男子・楢崎智亜、女子・野中生萌、野口啓代のフォールスは非常に悔やまれる展開となってしまった。リスクが高くミスをいかに最小限にできるかがスピード種目の課題である。今大会の経験から学んだことを来年の世界選手権ではしっかりと修正し大会へ臨みたい。大会終了後の各選手のコメントはすでに来年の世界選手権大会（東京開催）でのリベンジに燃えたものであった。

© Eddie Fowke - IFSC

© Eddie Fowke - IFSC

この悔しさを糧にこれから１年間また精進していくことを誓って世界選手権の締めくくりとなった。来年地元開催の世界選手権で日本チームの活躍を期待していただきたい。

（文責：安井博志）

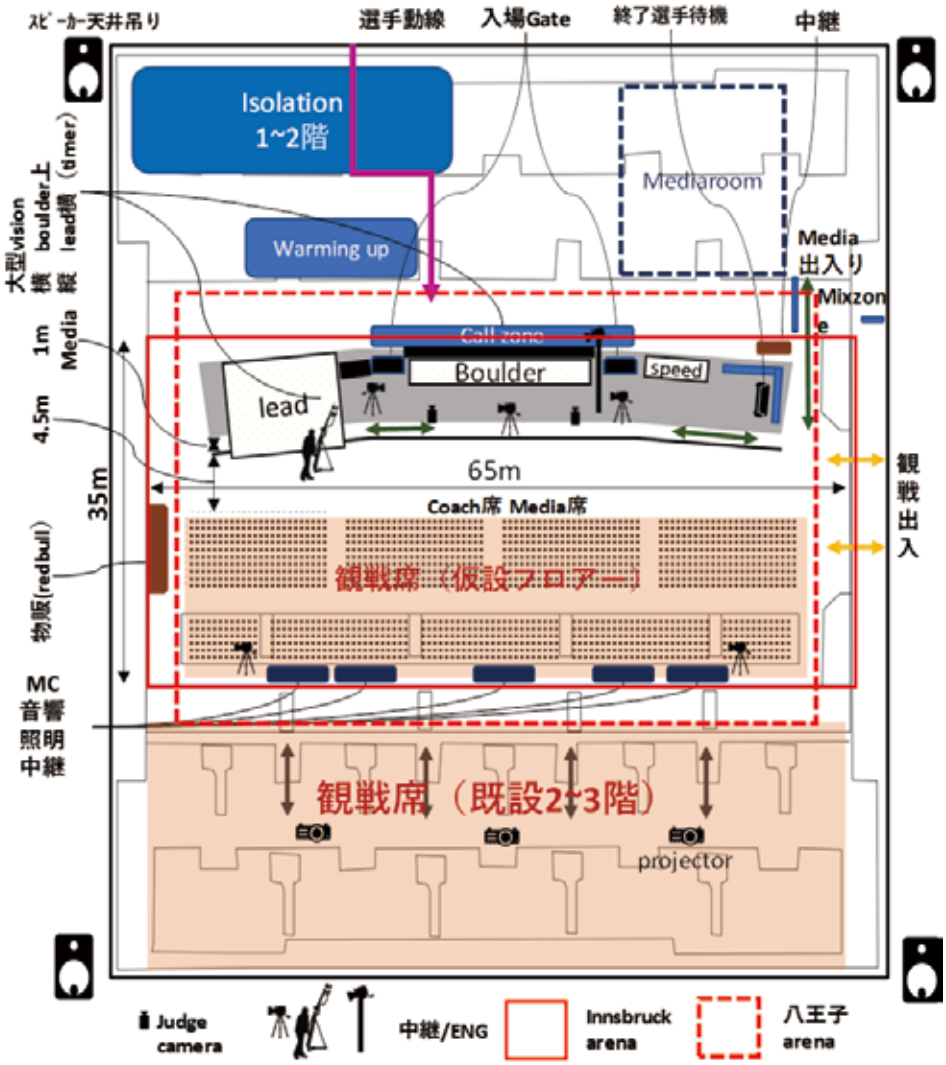
【競技委員長報告】

インスブルックの世界選手権は、昨年のユースに引き続きの開催。大きな大会に慣れている部分もあるが、市のバックアップ（施設）の充実、主催者の高い運営はクライミングの聖地に相応しいものであった。

会場は、予選Kletterzentrum Innsbruck（クライミングセンター）準決勝、決勝はOlympiaworld Innsbruck（1946年、1976年冬季オリンピック）で行われた。準決勝、決勝の会場は八王子とほぼ同じ広さ（インスブルック65 m × 35 m ＝ 2,275㎡、八王子60 m × 45 m ＝ 2,700㎡）であったが、諸室などは多く大会運営には利便性の高い施設であった。

運営面は、現在日本で行っている内容とほぼ同じ。細かなところでは参考になる部分も多く、来年の日本で開催される世界選手権に活かしたい。

（文責：村岡正己）



パラクライミング世界選手権2018

小林選手が大会３連覇

パラクライミング世界選手権大会2018に選手を派遣しましたのでご報告いたします。今回は８名の選手を派遣しました。内訳はＢ（視覚障碍部門）１男子２名、Ｂ２男子１名、Ｂ２女子２名、ＡＬ（下肢欠損部門）１男子１名、ＲＰ（神経障害部門）３女子２名。

予選は、３連覇を狙うＢ１男子小林幸一郎選手、初出場Ｂ２男子濵ノ上文哉選手、同じく初出場Ｂ２女子江尻弓選手、前回銅メダルのＲＰ３女子吉田藍香選手、初出場ＲＰ３女子吉田桃子選手の５名が突破。

決勝Ｂ２女子江尻選手は、緊張している中でも普段の力を出し切ったようであった。結果は４位。

決勝ＲＰ３女子は予選３位の吉田（桃）選手が、予選４位の選手の高度を上回りここで３位以上を獲得。予選２位のイタリアの選手が吉田（桃）選手の獲得高度の下で落下。予選１位の吉田（藍）選手は吉田（桃）選手の高度を難なくクリアし、最終ホールドに到達し優勝。ＲＰ３女子はワンツーフィニッシュとなる。

決勝Ｂ１男子小林選手は、鈴木直也ナビゲーター（Ｂクラスは下からホールドや登り方の指示ができる）との息もぴったりで他の３選手の高度をはるかにしのぐ高さまで登り、50歳での３連覇達成。Ｂ２男子濵ノ上選手は初出場ながら３位と大健闘する。

今大会は前回大会を上回る金２、銀１、銅１という成績を収めることができた。これは、選手がアスリートとしての自覚を持ち、トレーニングを積んだ結果である。各国のレベルが向上している中でこの成績は評価される。底辺を広げ競技者レベルの向上を今以上に図り、来年の日本での開催の世界選手権大会につなげていきたいと思う。

（日本パラクライミング協会会長　佐藤　建）

左から、濵ノ上、小林、吉田(藍)、吉田(桃) 各選手

JMSCA公認「岸和田CANCANカップ2018」第一回小学生リードクライミング競技会

（一社）大阪府山岳連盟

岸和田かんかんベイサイドモールに３月にオープンしたアーバンスポーツをテーマとした商業施設において、９月23日～24日にわたり全国規模の標記大会を開催した。南は長崎、佐賀県、北は青森、岩手県から約100名の応募があり86名の参加者となった。身長差や体力などを勘案して学年別に３クラスに分け低学年（女子11名、男子９名）は男女混合、中（女子16名、男子９名）、高（女子24名、男子18名）学年は男女別とした。

低学年はスピード壁を利用してオートビレー機によるトップロープ方式とし、中高学年は通常のリードクライミング方式により競われた。

施設は国際大会レベルであるにもかかわらず小学生クライマーの果敢なチャレンジにセッターも真っ青なクライミングが披露された。特に低学年クラスについては大会前にハーネス、ビレー、競技時間及びコミュニケーション等々様々な検討を行った。しかし、大会においては驚異的なパフォーマンスが発揮され、只々驚くばかりでした。初代チャンピオンには千葉県の安楽宙斗君（６年生）が輝いた。

不安定な天候に一喜一憂される大会だったが、当日は爽やかな天候に恵まれ岸和田の永野耕平市長のご臨席を賜りご挨拶いただいた。また、大会を支えていただいた多くの関係者の方々に感謝申し上げます。

（尚、競技結果についてはhttp://sangaku-osaka.com/をご覧ください。）

安楽選手のファイナルトライ

第119回 Mountain World

秋のネパール ローツェ西壁初滑降

池田常道

今年は高峰スキー滑降の当たり年となった。Ｋ２（8611ｍ）南東稜～南南東リブの初滑降がポーランドのアンジェイ・バルギエルによって成された（８月号本欄参照）と思ったら、今度はローツェ（8516ｍ）西壁が米国の男女ペアによって初滑降された。8000ｍ峰に残されていたスキー滑降の課題が二つながら解決を見た年として、記憶に残る１年となった。

ローツェ西壁は通称ローツェ・フェースとして知られ、1952年のスイス隊が初めて手を付けた。現在は、エヴェレストへ登るために毎年多くの登山者が行き来する。1956年春、エヴェレスト第２登と同時にローツェの初登頂も成し遂げたスイス隊（アルベルト・エグラー隊長）は、サウス・コルに通じるルートと分かれて頂上に突き上げる一条のクーロワールをルートに採って、５月18日、フリッツ・ルフジンガーとエルンスト・ライスがローツェの頂上を陥れた。一行が最終キャンプをサウス・コルに移してエヴェレストに登ったのはそれから５日後のことだった。

以後こんにちまで、90年秋に南壁を登った旧ソ連隊と2010年にサウス・コルから単独で直登したデニス・ウルブコ（カザフ）を除くすべての隊がこのクーロワールをローツェの登路として利用してきた。

ローツェの山体上部は堅固な岩のピラミッドになっているので、この傾斜50度のクーロワールが唯一のルートとなった。頂上まで固定ロープを張ってしまう昨今の8000ｍ峰登山ではさほど困難なルートとは言えないが、スキー滑降の対象としては狭隘で、頂上直下には岩も露出している。

これまでローツェ滑降を試みた例はいくつかある。エイドリアン・ボーリンガー、クリストファー・エリクソン、ジェイミー・レイドローらがネパールのハイシーズンに当たるプレモンスーンに狙ったが、いずれもクーロワール内の氷雪が途切れていたり、8500ｍという高さに負けたりして失敗に終わっていた。

高所スキーヤーの間で「夢のライン」と呼ばれてきたこの滑降に成功したのは米国の女流スキーヤー、ヒラリー・ネルソンとパートナーのジム・モリソンの２人だった。この秋はエヴェレストに向かう隊がなかったので、９月初めにＢＣを建設した一行は、アイスフォール・ドクターの助力を得てウェスタン・クウムに至り、6400ｍにＣ２を設けた。ここから頂上を攻撃したのは９月30日のことだった。

午後１時27分、イラ・ヌル・シェルパ、フー・タシ・シェルパのサポートを受けてダッチ・シンプソン、ニック・カリシュ（いずれもビデオ・カメラマン）と共に頂上に立つと、約760ｍのクーロワールへとドロップイン、そこを抜け出してからはフェース下部のスロープを滑り、Ｃ２に帰着した。ここで１泊した翌日Ｃ１に下り、標高差約2130ｍの滑降に成功した。

ネルソンは2012年にエヴェレストとローツェを24時間以内で継続登頂しており、ローツェ滑降成功のカギは、クーロワールの雪付きが十分かどうかにあるとみていた。両者ともデナリ（6194ｍ）やチョー・オユー（8188ｍ）の滑降経験がある。昨年、ヒラリーとモリソンは、インドのパプスラ（6451ｍ）をスキー滑降している。

＊

一方、ロシアのヴィタリー・ラゾとアントン・ブゴフキンは昨年、「デスゾーン・フリーライド」と名付けたプロジェクトを立ち上げて５座の8000ｍ峰の無酸素登頂と滑降を狙った。第１階のマナスル（8163ｍ）は昨年秋に成功、今季はアンナプルナⅠ峰（8091ｍ）を試みるつもりだったが、今季は深い雪と雪崩に敗退を喫した。計画ではこの２座に続いてエヴェレスト、Ｋ２、ナンガ・パルバットが予定されている。

エヴェレスト南東稜から見たローツェ。赤線で示したのが西壁クーロワール

新連載 ～創立60周年に向けて～(5)

『日山協と私』

長野県山岳協会　田村　宣紀

スポーツクライミングと国体山岳競技

東京2020オリンピックで、スポーツクライミングが追加種目となった。感慨と共に私なりの思い出が蘇る。

時は、26年前に遡る1991年の夏。この年、北信越国民体育大会は長野県の当番で、山岳競技のハイライトは登攀種目で、全国で初めての人工壁での競技は注目を集めた。会場は諏訪市蓼ノ海湖畔。

この年の５月に日本山岳協会会長に就任されたばかりの齋藤一男さんの姿があった。人工壁は鉄パイプ単管でコンパネを支える構造で、そこにホールドがとりつけられた。

齋藤会長は、「田村君。イイねェ。すっきりしているね。明快な勝負だねぇ。国体もこれからは、これだねぇ、…」、と明快だった。

当時の国体山岳競技は「縦走」「踏査」「登攀」の３種目。種別では「成年の男・女」「少年の男・女」の４種別で構成されていた。

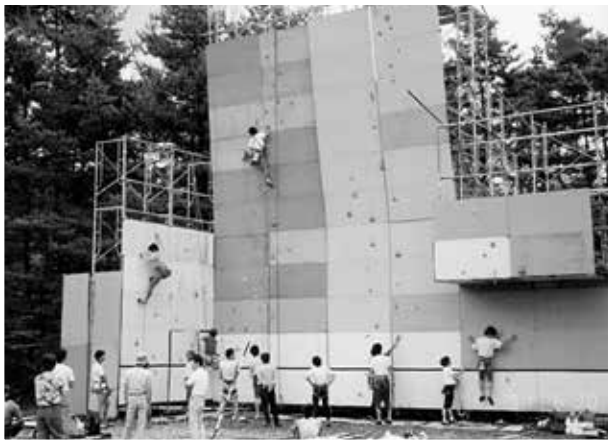
この頃、私自身、各地の国体に審判員として参画していた。しかし、常に悩みを覚えていた。それは、公平性の問題であった。例えば縦走競技では、雨の日と、晴れた日とでは決定的な違いが出る。審判員は藪の中に隠れていて、通過する選手が滑ったら減点！　昨日は天気がよかったのに、今日は雨になったから滑っちゃった。可哀そう…、等と疑問は募るばかりであった。自然の岩場を使う登攀競技もしかりである。

勝ち負けを伴う競技、すなわち、ゲームには３つの大原則がある。先ずは、公平性、次いで普遍性、もうひとつは観客がいるかどうかである。でも、残念ながら国体山岳競技には、この３つとも「無い」のである。

時代は国際的にも国内においてもスポーツクライミングが急速に発展していた。1991年10月、日本では初めてのワールドカップが東京で開催された。

同時期、私は日本山岳協会常務理事となり、会長の意向もあって競技登山の改革を担当することになった。齋藤会長率いる日本山岳協会は「競技登山審議会」を設けて諮問した。

審議会座長は、文部省登山研修所所長の柳沢昭夫氏が務め、国体山岳競技の改革が検討され、２年後の1993年４月、「スポーツクライミングをもって実施することが望ましい」と答申された。しかし、齋藤会長も私も、現職の間に改革に至ることはできなかった。その後、この答申が真剣に検討されたと聞くこともなかった。国体山岳競技がスポーツクライミングに集約されて実現したのは、この答申から実に15年もあとの2008年の大分国体であった。余りにも遅すぎた。



ワールドカップ東京大会1991(代々木公園)

開会式で挨拶する齋藤会長

平成30年度安全登山指導者研修会（東部地区）報告

９月15日（土）～17日（月）の３日間にわたり、埼玉県比企郡小川町の県立小川げんきプラザ及び金勝山において平成30年度の安全登山指導者研修会（東部地区）が開催された。昨年までは中高年登山者の事故・遭難防止を主眼とする「中高年安全登山指導者講習会」という名称で行われていたが、本年からより広い登山者層の安全のために名称が改正された。また参加者が、受講するだけではなく自発的かつ積極的に指導者としての学びを深め、さらにそれを自らの地域・組織に生かしてもらえるよう、「講習会」から「研修会」へと形式も変更された。

参加者は山岳会の指導的役割にある会員をはじめ、高校の部活動顧問の教職員、山岳救助活動に従事する各県警察・消防関係者、山岳ガイド、行政の野外活動事業者、登山を企画する旅行会社社員、といった多岐にわたる分野から応募があった。また年齢層もベテランから社会人になってまだ数年の若手まで幅広い年代から参加があり、全体では定員を超える58名の出席となった。

研修内容は「登山界の現状と問題点」「読図・ナビゲーション」「山のファーストエイド」を中心とした内容で企画した。特に昨今の遭難事例で非常に多い要因となり、埼玉県内でも事故原因のトップにあがる「道迷い遭難」について、講義をはじめ実習・実技においても「読図・ナビゲーション」がメインテーマとされた。また、埼玉県岳連主導による研修として、「山の応急手当（ファーストエイド）」に加えおそらくこれまでの講習会では実施されなかった、夜間実際に登山コースを歩いていただく「道迷い体験」を実施した。

第１日目は開会式後、講義Ⅰとして北村憲彦氏（名古屋工業大学教授、国立登山研修所専門調査委員長）による「登山の現状と安全登山に向けた指針」、引き続き講義Ⅱとして村越真氏（静岡大学教授、国立登山研修所専門調査員）による「道迷い防止の為のナビゲーション」がそれぞれおこなわれた。実習ガイダンスと夕食後19時より屋外実習として「道迷い体験」。実際には県内講師の先導によりコースを歩いていただき、各ポイントを地図上にマークしてもらう方式でおこなった。また、合わせて緊急避難（ビバーク）訓練も実施した。

参加者集合写真

２日目は前夜の「道迷い体験」コースを実際に再度歩いてもらいルートの確認と答え合わせ。暗闇の視界も展望もない状況下で方角と距離感、実際の地形から現在地を判別するのは、大変困難だとの声も聞かれた。その後、続けて村越氏による実地研修「磁石と高度計と地図によるナビゲーション実習」をおこなった。

昼食後は、午後の時間をすべて使って講義Ⅲ及び実地研修として、悳秀彦氏（埼玉県山岳連盟参与）による「山の応急手当」。応急手当、負傷者の一次搬送・緊急収容をそれぞれの項目ごとに講習し、それを班毎に分かれ実地研修するという方式で繰り返した。最後は応急手当をシミュレーション形式で実施して、各問題点を検証し終了となった。

最終日はまず講義Ⅳとして飯田雅彦氏（元埼玉県警察山岳遭難救助隊副隊長）により、「埼玉県における山岳遭難の実態」を時に生々しい現場の実態を交えなが

応急手当て講習及び実地研修

夜間研修「道迷い体験」

ら実際の事例や問題点をお話しいただいた。最後は北村・村越両氏による講義を交えた司会により、研修会全体を通した内容を研究討議（班毎）によって整理し、全体会議で発表することで内容の理解を深め、指導の目的や手段、手法について話し合い、修了証授与・閉会となった。

今回名称が変わった最初の研修会ということで、埼玉岳連としても手探りのところがあったが、主管団体として今後につながる研修会となるよう尽力させていただいた。幸いにも講師の皆様、参加者の皆さんとも大変熱心で、非常に内容の濃い３日間を精力的にこなしていただきましたことを心より感謝申し上げます。そして無事研修会を終了できましたことを、この場をお借りしてすべての関係者の皆様へ御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

（埼玉県山岳連盟　理事長　天野賢一）

みんな集まれ！ ジュニア登山教室 in 立山2018

てっぺんめざしてワイワイ登ろう！「みんな集まれ！ジュニア登山教室 in 立山2018」は、８月19日（日）～22日（水）の３泊４日の日程で、富山県立山町の国立青少年自然の家をベース基地として開催された。

この活動は、本協会ジュニア育成事業の一環として国立登山研修所との共催で、富山県教育委員会、立山町、国立立山青少年自然の家及び、富山県立立山カルデラ砂防博物館の後援をいただき、また、地元富山県山岳連盟のご協力の基に今年で９回目を迎えた。

今回は、一般募集の他、当協会の田中文男顧問が役員を務める埼玉県の「子供の町」から４名の男子生徒を含め、21名が参加した。参加者は小学２年生から中学３年生と高校生となった以前の参加者であった。高校生は、弟さんと一緒の参加で、その弟さんも以前からの参加者だが、中学生となりクラブ活動で山岳部に入ったとのことだった。この事業も当初の目的が達成されてきているようだ。また、以前は東京からの参加者が大部分を占めていたが、今回は地元富山県以外に、石川県、愛知県、千葉県からの参加もあり、参加者範囲が広がった。

集合場所の国立立山少年自然の家で、現地集合の参加者及びバスでの東京方面からの参加者が合流し、開講式が行われた。開校式は施設の立山広場で行われた。広場からはこれから登る来拝山や雄大な立山が望まれ、子供たちも胸を膨らませたようであった。登山研修所宮﨑豊所長から富山の自然を楽しんでほしいとの話の他。立山青少年自然の家の職員から歓迎の言葉、注意事項などの説明を受けた。その後、荷物整理もそこそこに、最初のイベントの来拝山登山を行った。来拝山は標高899．３ｍであるが、急登の続く山で、昔、立山が女人禁制の時代には、女性たちがここで立山を拝んだといわれる山である。登山の途中では、木の実を食べる猿が登って行く我々を横目で見ている姿も見られた。さすがに子供たちは元気で、長旅の疲れも見せず、最初の登山を楽しんだ。夜は食事、入浴を済ませた後、フリーセッションでこれから行動を共にする班編成を確認した。

20日（月）はプログラム通り、午前中は立山カルデラ砂防博物館の見学、午後は登山研修所でのクライミング体験を行った。博物館では、職員から立山の４つの特徴（上昇する山・火の山・氷の山・・水の山）の説明を受け、立山生い立ちの立体映像見学後、それぞれ展示物の見学やクイズなどを楽しみ、動植物などの知識も学んだ。その後、徒歩で登山研修所へ移動し、昼食をとった。メニューは外部にお願いしていた出来立てのカレーライスで甘口・辛口の好きな方を選んで食べ、

集合写真

クライミング体験

お替りする子も多かった。

昼食後は、人気のある体育館でのクライミング体験を行った。指導を担当する富山岳連所属の講師から注意事項等の話の後、それぞれ体の合ったハーネスを選んだが、サイズによっては数が足りず、順番を待つ子もあった。ハーネスは登山研修所のものは大きいため、子供用ハーネスは毎回地元のクライミングジムから借用している。参加者の中には、自分の靴、ハーネスをもっているクライミングを行っている子供もいたが、それぞれ設定した５ルートを頑張って登った。早々とトップまで登る子もいて、このジュニア登山教室を始めた頃の子供達に比べると、年々レベルが高くなってきているように感じられた。

クライミング体験後は宿舎に戻り、配布した立山の絵葉書で家族に「家への便り」として、それぞれ感じたこと想いなどを書いた。食事の後は明日の登山の班編成、準備を行った。当初は立山、浄土山、自然観察のコースを考えていたが、自然観察コースは希望者が少ないため、結果として、立山（雄山）、浄土山登山の２コースの班編成となった。

21日（火）は、いよいよメインの登山を迎えた。今まで登山日に限って天気に恵まれなかった方が多かったが、今回、天気はこちらの味方をしてくれそうで、下山するまでの好天を期待した。桂台の有料道路入口から室堂まで約35キロ車窓からの景色を楽しんだ。途中、立山スギや落差350ｍを誇る日本一の「称名の滝」を見ることができた。初めて見た子供にとっては印象に残ったことだろう。

室堂からはこれから登る雄山、浄土山や、カルデラ周囲の山が望まれ、準備体操後、それぞれコース別に分かれて登山を開始した。室堂からも見えていたが、今年は例年に比べ残雪の量が非常に少ない状態だった。室堂平までは盛りを過ぎてしまっていたが、チングルマ、ウサギギクなど高山植物を見ながら進み、ここから雄山コースは一ノ越から雄山へ、浄土山コースは室堂山を経由して浄土山へと分かれて登山した。

両コース共に皆頑張って歩き、全員が登頂することが出来た。下山も足元に注意しながら歩き、怪我人もなく、無事、登山を終了することが出来た。楽しみにしていたライチョウが今年は少なく、見られなかった人もあり、ちょっと残念であった。夜は短い時間ではあったが、子供たちは登山の疲れも見せず、昔からの友達のように班ごとの出し物でゲームを楽しんだ。

最終日の22日（水）は、４日間の振り返りを行った後、閉講式を行い、全員に修了証と記念バッジが手渡され

室堂平にて

た。その後、全員で「まんだら遊園」、「カモシカ園」を見学した。まんだら遊園は、立山信仰の立山曼荼羅の世界や、芸術家の作品を表現しているが、低学年の子供には一寸難しく感じられた。カモシカ園では、暑さを避けていたのかカモシカも小屋から出てこず、楽しみにしていたが残念だった。

参加した子供たちからは、立山の成り立ちや自然の素晴らしさ、友だちどうしの協力など、感想が寄せられた。この登山教室のねらいである「登山を通じて自然の素晴らしさを学ぶ」、「地域を越えた交流により、人とのふれあいの楽しさ、団体生活のルールを理解する」、「自立心を養い、自分で考えて行動できる」という目標は達成されたように感じている。

今回で９回となったこの登山教室については、事業への種々意見もあり検討しているが、次代を担う子供たちの自然への回帰と野外活動の体験不足を補う活動は、事故防止の安全登山、災害等不測の事態に備える対応のためには必須のものであり、これからも何が効果的か考えていきたい。　　（記　登山部　仙石富英）

安全登山サテライトセミナー（大阪）

期日：平成30年12月１日（土）～２日（日）
会場：モンベル本社３階（大阪市大阪市西区新町）
www.jpnsport.go.jp/tozanken/syusai/tabid/178/Default.aspx

あこがれの名峰に、短期間でチャレンジ！

【山麓乗り入れ】キリマンジャロゆったり登頂とアルーシャ国立公園サファリ 10日間

発着地 東京　旅行代金 526,000円～618,000円

出発日 12/14㈮・12/28㈮・1/18㈮・2/8㈮・2/22㈮・3/6㈬

※燃油サーチャージ（2018年９月20日現在：目安約０円～21,500円）が別途必要です。

旅行企画・実施　観光庁長官登録旅行業第490号／日本旅行業協会正会員／ボンド保証会員

アルパインツアーサービス株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第７東洋海事ビル４階 ☎03-3503-1911
大阪☎06-6444-3033　名古屋☎052-581-3211　福岡☎092-715-1557
e-mail:info@alpine-tour.com　http://www.alpine-tour.com

第７回関東地区自然保護交流会報告

平成30年８月25日～26日（１泊２日）、奥多摩・雲取山（雲取山荘泊）にて、５都県から26名を集め、第７回関東地区自然保護交流会を、（公社）東京都山岳連盟自然保護委員会の主管で開催した。

この交流会は関東地区各都県を持ち回りに、その地区毎の山岳環境をテーマに交流を行うもので、今回は「奥多摩町営小屋の閉鎖」及び小屋周辺の環境状況について現地視察、雲取山荘では飯田雅彦（元埼玉県警山岳救助隊副隊長）氏と新井晃一（雲取山荘主人）氏の講話を拝聴した、一昨年も同じ目的で計画したが、荒天のため入山を断念した経緯がある。

朝８時を少し回って、麓の小袖乗越駐車場に集合。ブリーフィングのあと奥多摩小屋へ向かって出発。汗まみれのなか予定の13時頃には五十人平（標高1750m付近）のお花畑を見て、嘗ては見事なヤナギランの群生があったといわれるお花畑がシカの不嗜好種のマルバダケブキに主役が交代してしまっている様子を実感した。稜線の山梨県側の天場を見つつ、奥多摩小屋へと到着。小屋やトイレの様子を見学。赤い字の「閉鎖」と太文字書きされ、「平成31年３月31日以降は、テント泊及びトイレも利用できなくなります」と添えられた告知ビラが貼られた玄関口をくぐる。暗い室内で細かくは見ることができなったが、壁面などが簡易補修されて老朽感が感じられた。トイレは昔ながらの「ボットン式」で異臭を放っており、好んで利用されるとは思えない様子であった。１時間近く見学してから、頂上へ出発。30分ほどで雲取山山頂（2017．１ｍ）へ、15時過ぎには雲取山荘へ辿り着いた。山荘の部屋に入り、16時少し後から１時間30分ほど飯田雅彦氏に前職埼玉県警山岳救助隊の経験を踏まえた山岳遭難事故について講話を、夕食を挟んで、新井晃一氏から１時間ほど奥多摩山荘の閉鎖経緯と今後の状況について講話を伺った。

（飯田雅彦氏講話要約）

現職であった頃からの経験を通し、山岳救助は山登りの危険以上の危険が伴うものであると思っている。配下の隊員が出動する度に、心痛な思いで無事帰還を願い続けている。山登りの際には絶対に事故を起こさないとの気持ちを心がけるようお願いしたい。埼玉県の救助体制ではあるが、警察32人に消防（ヘリ隊員）２名、航空ヘリでは警察（捜索）３機、消防（搬送）３機の体制で行っている。県内の山岳遭難事故は毎年60件以上起きており、死亡が年毎に５～10人となっている。雲取山周辺でも、白岩山などで25～70歳台のヘリ救助が起きている。熟達者であっても遭難しないという訳でなく、ヒューマンエラーが多くの原因となっていることが明らかである。最近の携帯電話の普及が遭難救助の位置探査に役立っており、通話の発信源を通信基地局から割り出すことも行っている。

雲取山頂にて（写真：小林貞幸）

（新井晃一氏講話要約）

昭和34年に建設された奥多摩小屋は奥多摩町の所有で、前任の管理が途中から引き継がれ、現在では雲取山荘が管理を行っている。小屋番は雲取山荘の従業員を配置している。

水面下で、数年前から小屋の閉鎖・廃止に向けた準備が進められてきて、今年の３月に奥多摩町から閉鎖を告知された。これ先立って、昨年秋頃に東京都山岳連盟から「小屋存続に向けた」署名運動が始まり、関係行政機関の調整が進み、「閉鎖」が決まり、閉鎖以降については、環境省奥多摩自然保護官事務所、東京都環境局・多摩環境事務所、東京都水道局等と協議を行い決定することとなった。東京都では来年度、「存続に向けた調査費」の予算付けが行われたこともあって、最低限キャンプ場及び管理棟の設置が予想される。一旦、「閉鎖」とはなるが、先々「存続に向けた」希望が払拭されたわけではない。雲取山荘も管理者としての立場を守り、「存続に向けた」検討を進めてゆきたい。

＊

翌朝、雲取山頂で記念写真を撮影し、快晴のなか、富士山などの眼前に広がる遠景を眺めながらの下山を開始。12時には麓の鴨沢・小袖駐車場へ到着した。奥多摩もえぎの湯で汗流した後、奥多摩ビジターセンターで今回の「ふりかえり」ミーティングを行い、奥多摩山荘の閉鎖・存続に向けた経緯について主管岳連からまとめの発言を皮切りに、参加メンバーの一人一人から意見や感想を述べ、交流会を締めくくった。

（文　自然保護委員会　松隈　豊）

シスパーレ登山隊2017がピオレドール受賞

第26回目となるピオレドールの授賞式が９月20日から23日にかけてポーランドで開催された。

ピオレドール（金のピッケルの意味）とは、年間で世界的に優れた登攀内容の登山に贈られる賞で、今年は日本のシスパーレ隊を含め、チェコのガッシャーブルムⅠ峰隊、フランスのヌプツェ隊の計３隊が受賞した。

日本のシスパーレ隊の２人（平出和也、中島健郎）は、2017年７月にシスパーレ（7,611 m）北東壁の新ルートから、アルパインスタイルで５日目に登頂、７日目にベースキャンプに下山した。隊長の平出にとっては、2007年、2012年、2013年に続く４回目の挑戦での成功となった。

※なおこの登山は、日本山岳・スポーツクライミング協会の平成28年度後期海外登山奨励金の助成を受けて実施されたものです。（登山隊の報告は、本誌583号に掲載）

ピオレドール受賞の平出、中島両氏（左から）

2018年度「上月スポーツ選手支援事業」認定式

９月５日（水）、ザ・リッツ・カールトン東京に於いて、2018年度「第17回上月スポーツ支援事業」認定式と「上月スポーツ賞」表彰式が開催された。

17回目を迎えたこのスポーツ支援事業は、日本を代表し、将来が期待されるスポーツ選手・指導者に対して競技能力の向上を図り、スポーツ活動に打ち込める環境を整えるための支援事業で、認定選手には年額60万円の助成金が１年間交付される。今年度は、スポーツクライミングなど13競技から、優れた素質を持つ78名が支援対象者として認定された。

スポーツクライミングの認定者は、川又玲瑛（宇都宮市立瑞穂野中学校）、谷井菜月（橿原市立光陽中学校）、抜井亮瑛（香芝私立香芝中学校）の３名。

認定書授与の谷井菜月選手

日本山岳文化学会 第16回研究発表大会

11月17日（土）～18日（日）に東京慈恵会医科大学・高木会館２号館南講堂（東京都・地下鉄御成門駅徒歩３分）で日本山岳文化学会の研究発表大会が開催される。

17日９時～18時「穂高岳・岳沢の森」（小疇尚）、「現代社会における冒険の意義と課題」（田渕義英）など会員による16演題の一般口演とショートスピーチ５題が行われる。また、13時より招請講演「山岳救助犬の導入に向かって」（作家・樋口明雄氏）を開催。

17日終了後に懇親会開催（参加費4000円）。

18日９時～12時は「遭難と情報」をテーマにシンポジウム（主管：遭難分科会）が行われる。

会員外は入場無料（予約不要、但し事前問い合わせが望ましい）。

〈問い合わせ先〉　日本山岳文化学会事務局・中岡久
E-mail:hisa-n@fine.ocn.ne.jp
HP:http://www.jamc.gr.jp

海外登山懇談会

日時：11月15日（木）19時～21時
会場：国立オリンピック記念青少年総合センター
　　センター棟304号室
交通：小田急線「参宮橋」駅から徒歩約７分
会費：500円

講師に横山勝丘、小阪健一郎の両氏を迎え、「旅に登る」をテーマにした懇談会です。

横山氏には、ヒマラヤ遠征時のＢＣやキャラバン中におけるボルダリングの楽しみ、小阪氏には、誰にも目をつけられていない辺境の地のクライミングについてそれぞれ語っていただきます。ご参加をお待ちしております。

平成30年度 臨時理事会報告

日　時：平成29年９月８日（土）　10：24 ～ 15：10
場　所：フォーラムエイト802会議室
出席者：八木原圀明会長、亀山健太郎・髙橋時夫・伊藤克己副会長、尾形好雄専務理事、小野寺斉・水島彰治・村岡正己・合田雄治郎・仙石富英・蛭田伸一・町田幸男・相良忠麿常務理事、吉田弘司・小宮山稔・森庄一・滝田博之・古賀英年・松本実・木村康男理事、内藤順造・中畠正喜・古屋寿隆監事
同席者：多賀啓弁護士
欠席者：平山裕示副会長、小日向徹常務理事、谷口浩平・小野倫夫・工藤文昭理事

理事数25名中、理事20名の出席があり、会議は成立。（定款第33条、定足数＝13名（１／２以上））

定款第32条により会長が議長を務め、議事録署名人として会長及び監事を指名（定款第34条による）して議事に入った。

１．議　事

⑴議案第１号　諸規程の整備について

合田常務理事が資料に基づき以下について提案説明を行った。

理事会決議事項は規程、常務理事会決議事項については規定、規程細則、基準とする。

①組織管理運営規程について

●一部訂正の上、全員一致で承認された。

②国体山岳競技関連規程

●常務理事会で改廃する改定案が諮られ、一部訂正の上、全員一致で承認された。

③スポーツクライミング競技会に関する公認規程

●一部訂正の上、全員一致で承認された。

④ＪＭＳＣＡメンバー規程

定款で言う正会員、賛助会員とは別の本協会を支援するメンバー制度であることが説明された。

既に岳連によっては、岳連の賛助会員から協賛金を頂いているところもあり、その違いをどのように説明すればよいのか、などの質疑があった。

●提案通り、全員一致で承認された。

＜11：50昼食ブレーク　12：30午後の部開始＞

引き続き合田常務理事が資料に基づき以下について提案説明を行った。

⑤役員選考規程

⑥役員候補者推薦委員会運営規程

⑦会長・副会長候補者推薦委員会運営規程

役員選考規程について中国ブロックから提案があった。 公益法人としての根本に近い部分で組織をどうするかなど活発な議論が行われた。

●役員選考規程第３条第１項１号及び２号の改定案について以下の３点について継続審議として次の第３回理事会（11／４）でまとめることになった。

①従来のブロック代表理事を６カテゴリーの枠組みから選出する案

②ブロック代表理事を撤廃する案。

③現状維持の案

外部理事の登用も踏まえて女性理事の選任は、必須であることが確認された。

２．報　告

①報告第１号　業務執行理事の職務報告

業務執行理事が職務報告を行った。

②報告第２号　2020年度第59回全日本登山大会開催地について

2020年度開催予定地の開催が難しく、別開催地を探していると報告。

③報告第３号　加盟団体規程に基づく加盟団体総会報告書の提出について

現在提出された分については分析中。未提出団体については再度督促。

④報告第４号　来年度の引っ越し予定について

現状について報告があった。

⑤報告第５号　創立60周年記念募金について

現状について報告があった。

JMSCA
平成30年度９月 常務理事会報告

日　時　平成30年８月30日㈭
場　所　岸記念体育会館・４階特別会議室
出席者　八木原会長、亀山、髙橋、伊藤、平山の各副会長、尾形専務理事、小野寺、水島、相良、村岡、合田、小日向、仙石、蛭田、町田の各常務理事、中畠、古屋監事、17名中17名出席

１．議　事

⑴平成30年度８月常務理事会・議事録の承認について（事前送付済）

異議なく承認された。

⑵各規程類の改定及び臨時理事会提出議題の確認について

理事会決議で改廃出来るものは規程、常務理事会で改廃出来るものは，規程細則。規則、基準とする。

組織管理運営規程、役員候補者選考規程、会長・副会長候補者推薦委員会運営細則、役員候補者推薦委員会運営細

則、国体山岳競技関連規程、スポーツクライミング競技大会に関する公認規程、スポーツクライミング競技審判員規程細則、スポーツクライミング公認ルートセッター規程細則、ＪＭＳＣＡメンバー規程、海外登山奨励金に関する規定、について一部訂正の上、理事会に提案することを承認。

(3)第59回全日本登山大会（2020年）の開催地について
九州ブロックでの開催が難しく、別途開催地を検討していることが報告された。

(4)アジア選手権について（予算等）
概算予算の報告があった

(5)2019年World Cupについて
ＮＦの権利回りを確認した後にＥＯＡにサインすることで承認。

(6)ＬＷＣクラーニ派遣選手の承認について
提案とおり承認。

(7)五輪クライミングウォール壁のレガシー利用について
ＳＣ部からの提案がないので、その旨返答することで承認。

(8) 臨時理事会次第について（確認）
一部訂正で、承認。

(9)常任委員の日当旅費交通費について
経過報告があった。

(10)アジアユース派遣選手について
提案とおり承認。

(11)Ｈ30年度前期海外登山奨励金選考結果について
異議なく承認された。

(12)委員長を含めた会議について（口頭）
11月12日（月）18時～21時開催を承認。

2．報告事項

(1)ＳＣ代表選手の強化助成金について

(2)第21回ＪＯＣジュニアオリンピックカップ大会告報告

(3)世界選手権2019の交渉経緯報告

(4)ＪＯＣ関連助成金交付決定額について

(5)国立登山研修所との新規共催事業報告について

(6)ココヘリ実績報告について

(7)登山道整備の法案化について

(8)ＩＦＳＣパラクライミングＷＣＨ2018選手派遣について

(9)キルギスマウンテインスピリット派遣でレーニン峰登頂報告

(10)７月末までの委員会ごとの収支報告

3．指導員・審判員　検定結果報告

(1)ＳＣコーチの認定
矢花誠司（山梨）、尾形和俊（長崎）、三浦真理子（愛知）、内藤聡（山梨）

(2)ＳＣ上級コーチの認定
佐藤豊（埼玉）、鈴木友希（埼玉）、有枝樹雄（東京）、篠崎喜信（東京）、中貝次郎（大阪）、安井博志（鳥取）、木村伸介（東京）

(3)ルートセッター
Ａ昇格：徳永一也（福岡）、濱田健介（滋賀）、Ｂ昇格：芝田将基（栃木）、杉田雅俊（埼玉）、徳永潤一（愛媛）

(4)審判
Ａ昇格：高山光世（長崎）、有地伸弘（千葉）、Ｂ昇格：長谷川　国広（茨城）瀬谷修（茨城）、戸田大輔（三重）、佐藤建（広島）、杉山将崇（滋賀）、百瀬恭平（千葉）、栗田祥司（東京）、難波利行（静岡）、小島一剛（岐阜）、本多隆志（鳥取）、佐橋秀男（愛知）
上記(1)～(4)は、異議なく承認された。

4．専門委員会動静（７月～８月）

(1)指導委員会
７月31日(月)
常任５名、専門２名出席、２名委任

ア）報告
①公認スポーツ指導者関係規程・規約について
②夏山リーダー資格について
第１回参加者：受講者36名、講師：指導委８名、遭対委17名　合計61名
③ ＳＣコーチ養成講習会報告
④ＳＣ上級コーチ養成講習会報告

イ）検討事項
①登攀研修会の開催要項について
「くらしの杜クライミングジム」（愛知）で開催　10/27、28
②地下倉庫の整理について
８月22日(水)　18：00から実施
③新指導者制度について
テキストの作成、オフィシャルブックへの申請、規程・規約集の改修

(2)マーケティング委員会
８月９日(月)　出席：５名（欠席：１名）

ア）報告事項
①新常任委員　山田洋氏の紹介
②リリース配信について
③ＪＭＳＣＡ　ＨＰでの発表事項
④ＪＭＳＣＡパートナー関係
⑤アプルーバル関係（１件）

イ）協議事項
①リリース予定
②取材対応
③アジア選手権セールス
④Ｎｕｍｂｅｒにおける次回の記事
⑤スケジュール関連

(3)国際委員会
８月21日(火)　出席：８名、委員：２名

ア）報告事項
①「大宮求さんお別れの会」
８月７日(火)　アルカディア市ヶ谷
②キルギスレーニン90周年派遣
波多腰耕弥氏、８月５日に無事登頂。
③海外登山奨励金前期分選考結果

イ）協議事項
①海外登山懇談会について
11/15(木) 19：00　国立オリンピック記念青少年総合センター
②国内外に向けてのＨＰ案について

(4)山岳スキー委員会
８月23日(木)　ネット会議
出席：７名、委員：３名

ア）報告事項
①栂池スキー場及び栂池高原観光協会の報告

１）協議事項
①今後の山岳スキー競技について
②平成31年度大会について
日程：４月６日(土)、７日(日)　会場：栂池

5．その他の重要事項

８月８日～８月30日

(1)ＩＦＳＣとの打合せ／世界選手権2019
８月８日(水)　13時～15時　於：岸記念体育会館　平山副会長、尾形専務理事、村岡、合田、小野寺常務理事

(2)内閣府噴火時等の避難計画の手引き作成委員会　８月９日(木)　於：中央合同庁舎８号館　尾形専務理事

(3)第３回「山の日」記念全国大会
８月10日(金)～11日(土)　於：鳥取県米子

寄贈図書

寄贈本	(株)山と渓谷社	それいけ避難小屋／橋尾歌子
	サンポスト　金子弥生	スポーツクライミング ボルダリング
	(一財)法人ほめ育財団	「ほめ育」マネージメント
	東京新聞	ゆる山歩き／西野淑子
	東京新聞	図解　山の救急法
雑誌	Club alpino italiano	「Montagne360」Settembre2018
	(株)ネイチュアエンタープライズ	「岳人」No.856
	(株)山と渓谷社	「山と渓谷」No.1002
会報	兵庫県山岳連盟	兵庫山岳
	(公財)健康・体力づくり事業財団	「健康づくり」No.485
	日本トレーニング指導者協会	「JATI EXPRESS」Vol.66
	(公財)全日本ボウリング協会	「JBCnews」第561号
	(公財)日本万歩クラブ	帰れ自然へ 2018/10.11
	常北山水会山岳部	「山水」第44号
	日本勤労者山岳連盟	「登山時報」No.524
	東京野歩路会	「山嶺」VOL.96 NO.1063
	新潟県山岳協会	新山協ニュース
	おいらく山岳会	「山行手帖」No.706
	日本ヒマラヤ協会	HIMALAYA No.486
	大阪府体育館	「季刊　府立体育館」No.126

市・大山町　伊藤副会長、尾形専務理事
(4)第 21 回ＪＯＣジュニアオリンピック
８月 11 日(土)～ 13 日(月)　於：富山県南砺市桜ケ池クライミングセンター
八木原会長、村岡常務理事
(5)第 18 回アジア競技大会結団式
８月 13 日(月)　於：グランドプリンスホテル新高輪　安井強化委員長
(6)ルートセッター講習会　８月 14 日(火)～ 16 日(木)　於：南砺市桜ヶ池クライミングセンター　山本委員長
(7)第８回ジュニア登山教室 in 立山 2018
８月 19 日(日)～ 22 日(水)
於：国立立山青少年自然の家
仙石常務理事
(8)第 18 回アジア競技大会
８月 23 日(木)～ 27 日(月)　於：ジャカルタ・バレンバン　小日向常務理事

表紙のことば

今月の表紙写真は、トウインズ（別名ジンミゲラ）。筆者が初めてシッキムのゼム氷河を訪れたのは 1991 年だが、その時点でトウインズは未踏峰だった。ヒマラヤの未踏の 7,000 峰が残り少なくなった中で、7,350 m の未踏峰は、当時、第３位にランクされる未踏峰であった。この時点まで未踏峰で残されてきたのは、多分に政治的理由によるところが大だが、隣接峰があまりにも高名なカンチェンジュンガということで、不遇を囲ってきたのも確かだ。

英語で「双生児」を意味するこの山を初めて世に紹介したのは、D. W. フレッシュフィールドである。しかし、カンチェンジュンガ北東支稜から眺めると、主峰～東峰間は約２ km も離れており、双子というよりは、親子のように見える。　（写真撮影者・尾形好雄）

編集後記

今夏、山岳遭難事故の発生は警察庁のまとめによると、昨年同期より 110 件増え、統計を取り始めた 1968 年以降最悪の 721 件、遭難者 793 人で最も多く、死者行方不明者 71 人だった。

遭難原因は「疲労」と「病気」の増加が目立ち、猛暑の影響で体力の消耗が激しかったのではと分析されている。ＳＮＳ等で山の情報、知識は十分入手できるが、山登りの基本である体力は自分持ちである。無理せず身の丈のあった山を目指しましょう。

（広報担当 水島彰治）

登山月報　第 595 号
定　価　110 円（送料別）
予約年間　1,300 円（送料共）
昭和 45 年 12 月 12 日
第三種郵便物認可
（毎月 1 回 15 日発行）
発行日　平成30年10月15日
発行者　東京都渋谷区神南 1−1−1
岸記念体育会館内
公益社団法人
日本山岳・スポーツクライミング協会
電　話　03 − 3481 − 2396
ＦＡＸ　03 − 3481 − 2395

一般財団法人 日本トレイルランニング協会
〒252-0184
神奈川県相模原市緑区小渕1545-1
☎042-687-4011　FAX 042-687-3980
E-mail kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp

NPO法人 北丹沢山岳センター
神奈川県・山梨県東部トレイルラン連絡協議会
事務局　〒252−0184　神奈川県相模原市緑区小渕1545−1
TEL 042−687−4011　FAX 042−687−3980
E-MAIL kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp
◦ 北丹沢12時間山岳耐久レース実行委員会
◦ 陣馬山トレイルレース実行委員会
◦ 道志村トレイルレース実行委員会
◦ 八重山トレイルレース実行委員会
◦ 東丹沢宮ヶ瀬トレイルレース実行委員会
◦ 上野原秋山トレイルレース実行委員会
大会々長　杉本憲昭

山岳雑誌 岳人（がくじん）
山と人、時代をつなぐ「岳人」

11月号 発売中
【特 集】 雲海の山　朝焼け、夕焼けの絶景
★モンベルのウェブサイト
全国のモンベルストアや書店にて発売中！
毎月15日発売　価格815円(+税)
年間購読がおすすめです。
購読割引　送料無料　限定品プレゼント
年間購読なら、お得な価格で毎月お手元に冊子が届きます。
通常本体価格12冊 ~~9,780円~~(+税) → 年間購読なら12冊 8,965円(+税)
1年間で815円 1冊分無料！
年間購読特典　岳人オリジナルグッズをプレゼント！
岳人ミニワレット（2個セット）

サイズ：9×10cm
※カラーはお選びいただけません
さらに
はじめてお申し込みの方に

岳人ピンバッジ
ご継続の方に

特製マガジンBOX
年間購読のお申し込み　WEB https://www.gakujin.jp/　全国のモンベルストアでも受付中！
お問い合わせ　モンベルポスト　0120-982-682／TEL 06-6538-5797
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

あなたを守る。あしたを作る。

三井住友海上

損害保険と聞いて、なにを思い浮かべますか？

ケガ、災害、事故…日々の中で起こりうるリスクをカバーする。それは私たち三井住友海上の重要な任務ですが、すべてではありません。たとえば同じ自動車保険でも、暮らしの変化や自動車の進化を見つめて改善を続けること、宇宙開発や再生医療など、まだ世界にない保険を新しく作ることで社会の前進をサポートすることも、とても大切な役割です。変わらない一日に寄り添い、より豊かな明日を実現したい。だから私たちは、守ることと作ること、その両方を繰り返しながら前へ歩み続けます。

三井住友海上
時空保険
探査部
Space-time Insurance
Exploration Department

立ちどまらない保険。
MS&AD
三井住友海上

東商アソシエート株式会社　www.climbing-tosho.com　Tosho Associate

日山協 山岳共済会 〒170-0013 東京都豊島区東池袋 3-7-11-707

TEL 03-5958-3396 FAX 03-5958-3397
E-mail sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp
月曜日～金曜日 10:00～17:00（祝日除く）

携帯からも資料請求ができます。
公益社団法人 日本山岳・スポーツクライミング協会
携帯サイト（www.jma-sangaku.or.jp/mobile/）

WEBからもお申込みいただけます（www.sangakukyousai.com）